

## ■ 書 評



### 双極II型障害という病 —改訂版うつ病新時代—

内海 健 著  
 勉誠出版  
 2013年7月 264頁  
 本体価格 1,800円+税

本書は、2006年に上梓され、好評を博し、増刷を重ねた「うつ病新時代—双極II型障害という病」の改訂版である。

振り返れば、2006年前後は、わが国においてうつ病医療のポピュラリゼーションが一挙に加速された時期であった。厚生労働省の統計は、2005年10月の時点で全国のうつ病・躁うつ病(保険病名)患者数が92万人超と報告し、わずか5年間に倍増したことが話題になった。同年、故・樽味 伸が急逝する直前に発表した「ディスチミア親和型うつ病」に関する論考は、一般の精神科臨床医の共感を広く得たが、間もなくメディアを通じて、その呼称のみが一人歩きし始め、今日の「新型うつ病」言説につながってゆく。一般向きの啓発書が相次いで出版され、コンビニの店頭にも並ぶような文字通り「うつ病新時代」——小泉政権の終盤で世相に軽躁とうつのムードが混じていたという意味でも——が到来した。しかし、玉石混淆の数の書籍のなかで、本書は玉中の玉というべき輝きを燦然と放っていた。今日の気分障害の中核となる病理は、「不安定性、決定不能性」であるという指摘に思わず首肯した読者は数知れないと思う(評者は、当事者からも読後感を聴いた)。しかも、終盤には著者得意のポストモダン時代の社会文化論——「大きな物語」の失墜——が目眩く展開され、息を飲む。まさに、当時、世に出るべくして出た一冊であったと思う。

著者の語り口は、その底流に関西人ならではの

サービス精神が流れているので、精神病理学に疎い一般の医家にも親しみやすい。例えば、フルシチョフや中島らもの病跡学は興味深い。本書を読んで著者のファンになった読者も多く、以後、著者は各地の講演会に引っ張りだことなった。著者のような精神病理学の第一人者が公に向けて発言することは、今日ではとくに意義がある。精神科医全体の品格 *integrity* の象徴となるからである。

さて、今回の改訂版では、旧版の第4章と第6章が大幅に加筆され、タイトルもそれぞれ「治療の方針」と「混合状態」へ解題された。前者では、当事者に向けたアドバイス、チームワークの大切さ、および抗うつ薬を含む薬物療法に関する著者の覚書が更新されている。後者では、症例を提示して、「混合状態のスペクトラム」「軽症化の逆説」「時代的な要因について」の論考が追加された。

加筆されたある症例の考察の一節を引用しよう。

「未熟性はむしろ治療者の側にある。患者の折り目正しい態度に甘えて、病状が把握されていない。それゆえ苦痛が拾えていない。その代償が、患者の欠勤や飲酒である。それが一旦あらわになると、治療者は裏切られたような気持ちになる。…これは未熟な逆転移である。」

この症例を読むだけでも、既に旧版を所持していても、改訂版を新たに購読する価値があると思われる。

さらに、改訂版では装丁も一新された。旧版は、橙色の生地にコラーージュを施し、いかにも躁的な刺激性が強かったが、改訂版では静謐なオブジェの写真に変わっている。タイトルに魅かれて初めて本書を手にとる当事者の心中を思いやったのではないだろうか。そのような細やかな気配りも随所に感じられる改訂版である。

(黒木俊秀)